花子の女子高生日記

山田花子

『ピンクハウス』(91年1月号)より

『マンガ制作メモ』より

小説　「ハムスターの気持ち」(作)山田花子

俺、ハムスター。まァ、ハムスタ一っていうネーミングは、人間が、勝手につけた名なんだけど。でも、人間たちは、俺達のことを、ハムスターって呼ぶから、人間が、この小説を読んで解り易いように、ハムスターってことにしとこうか。俺、ガキの頃は、ペットショップという所で、たくさんの仲間達と平和に暮らしてたんだけど、ある日、大きな手が上から降りてきて、オレをせまい箱の中に押しこめてしまったんだ。俺、苦しくて、死ぬかと思ったよ。ついた所は、金アミのカゴの中だった。どうやら、小学4年の大月ケンジという人間の少年に、俺は、800円で売られたらしいんだ。ひどい話だよなァ、俺には、そんなつもりは全然ないのに、勝手に売られちまうんだぜ。でも人間にとっては、しょせんちっぽけな無力なハムスターだ。どうすることもできなかったのさ。他の仲間なんて、「実験動物」にされちゃって医大かなんかで、ガン細胞注射されたり、中ボンさー手術されて、脳の一部をメスでけずられちゃったり、体中に、電極さしこまれて、電流ながされちゃったり、ヒサンな仲間も一杯いるっていうから、俺なんか、まだ、まし な方なのかなァ。それは、ともかくとして、ケンジは

① 俺のこと、最初は、けっこう、かわいがって

「ゼツボー天国」

何てあさましい生命力!!
あきらめの果に
ゲラゲラと笑いころげた
嫌になればなるほど
ミャクミャク生きてしまった(あーあ)
絶望しすぎて天国にのぼった
ここは現世か夢の中か
どっちだっていいけどね♡

「泣きマネ」
おまえは
何のために生きのびたのか
目はつぶれ　手足を失くし
血をダラダラ流しなら
泣いているのかと思って
顔をみたら笑っていた
何がそんなにウレシイのか
とてもたのしそうな顔だった
きっと泣いてるフリして楽しんでたんだろう

「短距離ランナーの孤独」

丸尾末広

以前ある詩人から、「生きてりゃそのうちいい事があるよ」と忠告された事がある。

別にその人の前で「もう死にたい」などと言ったわけではない。いきなり、そう言われたのだ。自分には自殺の願望はない。

どうやら我が漫画の主人公が、手首を切って自殺を図る場面をそのまま作者自身の切迫した感情と解釈しての忠告のようだが、これ程人を馬鹿にした忠告があろうか。

たしかにいい事は少ないが、いくらなんでもいきててもひとつもいい事がないから死んでしまおうなどと考える程情けなくはない。

いじめを苦に自殺した中学生がいる。山田花子の死を作品のイメージから、そのようなものと考えるのは短絡的に過ぎよう。岡田有希子や沖雅也を見よ。自殺する人間は皆ナルシストである。死ぬ程自分が可愛いいのだ。山田花子の死に精神の葛藤の重さや、敗北者の悲惨な陰はないように思える。

女性カメラマンのダイアン・アーバスは数十回もの自殺未遂を犯し、ガスオーブンに頭をつっこんで果てた。どのような陰惨な自殺にも夭折の甘い腐臭は嗅ぎとれる。自殺の為の自殺。藤村操に代表されるような形而上学的自殺者の「人生不可解」といったいかめしいニヒリズムの鎧は今時はやりはしない。

文化の軽量化は生死の軽量化に比例する。

自分は山田花子とは一面識もなかった。たのまれてサインをした事があるけれども編集者を中継しての事だった。『ガロ』に登場した女性漫画家の中で自分は山田花子を最も高く買っていた。理由はおもしろいから。ぎこちないデッサンとペンタッチで精いっぱい漫画的デフォルメーションを排しようとしている絵には、キッチュな緊張感がみちている。

女性漫画家にありがちな、ウスバカゲロウのようなお手軽な絵で、神妙なモノローグ体の内面描写をするというパターンから見事に脱却していた。テーマはただひたすら人間関係のまずさと苦痛。身の置きどころのなさ。どの作品もページ数は少なく、例えば近藤よう子さんのような長編大河ロマンの人とは対極にあった。

漫画家をさらには人生を長く続けてゆく為にはあまりにも、脈拍が早すぎたといってよい。

自分は人生だの青春だのに何の興味もないが、間違えて地球に生まれてきた人の奇妙な人生には興味がある。この世には多くの地球内異星人が隠れ住んでいる。

地球人にとって何でもない風邪のウィルスも異星人にとってはエイズウィルスにも匹敵するであろう。山田花子がどのようなウィルスに犯されていたのか、一面識もない自分は勝手に想像するしかないのだが、「強く生きる」という幻想をもった暑苦しい人々からは、ここぞとばかりに「暗い」だの「甘えている」だの「命のとうとさがわかっていない」だのと苦言が寄せられるであろう。

自分は山田花子の死に、人間の生命といういかにも重々しく語られるものが、実はいかに軽いものであるか、思い知らされているのだ。

ふけば飛ぶようなあなたと私の命。

一度も逢わなかった山田花子さん、さようなら。

一九九二年六月